

【解答例】

第1問

平安初期の文章経国思想を背景に天皇の親政を補佐した文人官僚は、皇親や外戚による他氏排斥にあって没落した。公卿会議が主導する朝廷政治が先例を踏襲する年中行事と化す中で、家格が固定化された貴族は大学別曹で実務官僚として必要な教養を習得し、外戚の藤原北家は摂関として天皇の機能を代行する形式が整備された。

第2問

- A 荘園領主は年貢徴収のため、田地の面積などを調査する検注を行ったが、その際、地頭による新開発地の把握・課税が重視された。
- B 地頭請では一定の年貢納入を請け負う代わりに地頭に荘園の管理が一任されたため、地頭は荘園内の荒野の開発を進めるとともに、荘園領主の検注を拒否して荘園に対する支配を強めていった。

第3問

- A 明暦の大火による江戸復興費用や鉱山からの金銀産出量の減少、寺社造営費用の支出増大などによって、幕府財政は逼迫していた。
- B 年貢収入の多い豊かな地域では大名の手伝普請により復興を進めたが、生産性の低い地域に対しては十分な復興策を講じなかった。そのために、二次災害が起こるなど根本的な解決にならなかった。

第4問

- A 当初は旧公家と大名に与えられた華族の地位を、国家に功績のあった者にまで範囲を広げて、憲法制定と議会開設を前に、列強の貴族にあたる層を促成で形成し、将来の貴族院を作る準備を図った。
- B 高橋是清は普選運動が高まる中で貴族院や官僚が支持する清浦奎吾内閣に対抗しようとしたが、貴族院議員であったために衆議院議員にはなれず、また爵位を持っていたために被選挙権がなかった。